

リベラ (Libella) はラテン語でトンボの意味です。あおぞら財団はトンボが飛び交うまちの再生を願って活動しています。

りべら

2016.11

142

号

りべら

2016.11 142 号

発行所:公益財団法人公害地域再生センター(あおぞら財団)
〒555-0013 大阪市西淀川区千舟1-1-1あおぞらビル4階

特集:あおぞら財団20thアニバーサリー

20年の道のり山あり谷あり... 1

森脇君雄さんからメッセージ... 4

西淀川公害患者と家族の会からメッセージ... 4

公害地域再生に大切な視点 宮本憲一... 5

これまでと今後の財団活動-20年を節目として- 村松昭夫... 8

忙中一筆 傘本宏夫... 7

ぶらりとゆるりと西淀川めぐり... 9

世界の大气汚染と交通政策 II. インド編... 9

西淀川モノづくり会社... 10

リレー連載 あおぞら財団にじゅうまる!

道路・交通環境に関わる、あおぞら財団の20年の取り組み... 11



あおぞら財団職員とあおぞらビル、歌島橋交差点

あおぞらフォトギャラリー



デンマーク式の子ども自転車教室を行いました。子ども達はゲームを通して、自転車でのバランスのとり方や動かし方、他者の自転車の動きの予測について学びました。(2016.10.9・10)



ニシヨドガワ ノラシゴト2016 親子で始める菜の花栽培 搾油イベント(2016.8.27)

あおぞら財団とは

1960年代から問題となった大気汚染公害によって、多くの人が健康被害を受けました。その責任を問う西淀川公害裁判(1978～1998)では公害患者が勝利しました。患者は「手渡したいのは青い空」を願い、裁判の和解金の一部を使って1996年にまちづくり組織・あおぞら財団を立ち上げました。まちづくり・資料館・環境学習・公害患者の保健・国際交流の事業を行い、持続可能な地域づくりに取り組んでいます。

あおぞらビル

【1F】地域交流スペース「あおぞらイコバ」

会議、ギャラリー、コンサート、上映会などにご利用いただけます。
午前:1,000円/午後:1,300円/夜間:1,300円/全日:3,000円

【5F】西淀川・公害と環境資料館(エコミュージズ)

西淀川公害や環境について、地域の歴史などが知りたい人はぜひお越しください。

開館日 月曜日と金曜日(10:00～17:00)/要事前電話予約

●いずれも、予約・お問い合わせは4F事務所へ



大阪市内で採用された新任の先生方78人を対象に西淀川公害を取り上げた人権研修を行いました!(2016.8.17)

お知らせ

●第45回公害環境デー

日時:2017年2月4日 10:00～18:30

場所:エルおおさか 南館ホール

テーマ:「いま、あらためて原発を問う」

主催:第45回公害環境デー実行委員会

事務局:大阪から公害をなくす会:TEL 06-6949-8120

<http://oskougai.com/>

●第4回 日中環境問題サロン

「中国の公害・環境問題と環境NGOの取り組み」

日時:12月21日(水) 18:00-20:30

会場:大阪グランフロント アクティブスタジオ

(大阪市北区大深町3-1グランフロント大阪

ナレッジキャピタル 北館2F)

スピーカー:中国で活躍する専門家、環境NGOメンバー数名

〒555-0013 大阪市西淀川区千舟1-1-1あおぞらビル4階
(TEL)06-6475-8885 (FAX)06-6478-5885
電子メール:webmaster@aozora.or.jp <http://aozora.or.jp/>

会員・寄附募集

あおぞら財団への寄附や賛助会費は、税制上の優遇措置があります。

●賛助会員 会員の方には機関紙「りべら」などをお送りします。

【年会費】個人:年一口5,000円、学生:年一口2,000円、
法人・団体:年一口10,000円

●会費・寄附の振込先

*郵便振替口座 00960-9-124893 加入者名:あおぞら財団

*三菱東京UFJ銀行 歌島橋支店 普通 3764689

口座名義:あおぞら財団賛助会員

公害患者意識調査からデイサービスセンター「あおぞら苑」呼吸リハビリテーション



設立当初は公害患者のリハビリとして、園芸療法という方法を模索しており、「ふくの庭」で実践を重ねていましたが、その後は水中リラックス教室の試みを経て、公害患者の健康維持を目的に「呼吸リハビリテーション」に取り組んでいます。現在は「楽しく呼吸会」と題して、診療所で呼吸器疾患の患者と勉強会を開催し、一方で医療従事者のための講習

もおこなっています。これらの事業の基礎となった調査が、2002年の「公害病認定患者の生活実態調査」です。これにより、公害患者が慢性的に抱えている息苦しさを解決するためのリハビリが必要であること、公害患者の高齢化と独居の状況が、発作による孤独死を引き起こしていることが把握され、呼吸リハビリテーションのプログラム開発や、デイサービスセンターあおぞら苑の開設につながっていききました。



実態調査があったから、あおぞら財団は全国の公害患者に信頼をされ、環境省からも信頼されたのだと思います。



「西淀川・公害と環境資料館」オープン、公害資料館ネットワークの事務局に

あおぞら財団ができるきっかけとなった「地域再生マップ」に「公害資料館」が書き込まれており、設立当初から公害の経験を後世に伝えるための活動が行われることとなりました。その活動は、西淀川に留まらず、全国の公害地域に公害資料の保存を呼び掛け、環境庁文書をはじめとする公害・環境問題資料の保存に関する緊急要請(2000)を行う側面もありました。資料を収集し目録化する中で、大阪人権博物館(リバティおおさか)にて企画展(2002)をする機会を得、資料保存の重要性を公害患者に理解してもらえるようになりました。2006年3月にはあおぞらビルの5階を「西淀川・公害と環境資料館(エコミューズ)」としてオープンし、資料の電子化や研修に取り組むこととなります。研究成果として『西淀川公害の40年』(ミネルヴァ書房、2013)の刊行や、環境再生保全機構webサイト「記録で見る大気汚染と裁判」にて西淀川・四日市・倉敷の公害裁判の資料の整理・公開を行ってきました。現在は、公害資料館ネットワークの事務局を担い、公害資料館連携フォーラムを年に1回開催しています。



環境省の職員研修を受け入れることができるようになったのはすごい。行政に患者の実態を伝えることができるのは、あおぞら財団しかできないと思っています。



まちあるき探検隊で西淀川の情報を集める

あおぞら財団がまちづくりのために、最初に行った基礎調査です。1996年から京都大学の神吉紀世子評議員とあおぞら財団事務局が協議して案を練り、西淀川の前風景の聞き取り調査など、市民参加型で行われました。これらの成果が『都市に自然をとりもどす』(学芸出版、2000)として出版されています。



この活動は良かったな。歩くことで新しい町を発見して楽しかったです。患者にとってもいい経験だったよ。



エコドライブでトラック事業者との協働、自転車まちづくり

西淀川公害裁判が和解した1998年当時、未解決の大気汚染問題は「自動車」でした。国土交通省は、和解後に沿道改善事業として、緑化や環境ロードプライシング、歌島橋地下道整備などの施策を講じていきます。あおぞら財団でも、それらの施策が行われるための提案活動を行ってきましたが、公害軽減につながる取り組みとして、2003年から中小運輸事業者へのデジタルタコグラフを導入し、エコドライブを推進する取組を始めます。大阪府トラック協会や池田市、大阪大学と協働してこの事業をやり切り、2006年の地球温暖化防止活動環境大臣表彰を受賞しました。その後は、車に依存しないまちづくりを目指して、自転車まちづくりを推進し、御堂筋サイクルピクニックの開催やタンデム自転車の普及に努め、2016年8月には二輪タンデム自転車が、大阪府内の公道で走行できるようになりました。



公害をなくすことと自転車が当初は結びつかなくて、どうかなと思っていましたが、成果を出しているのはすごいと思っています。



20年の道のり 山あり谷あり

あおぞら財団は1996年9月11日に西淀川公害裁判の和解金の一部を活用して設立しました。2016年9月11日から21年目に突入します。初期のあおぞら財団の活動から、現在の活動の流れを追いつつ、初代理事長の森脇君雄さんにコメントしてもらいました。

あおぞら
財団をつくった



森脇君雄さん(初代理事長、西淀川公害患者と家族の会会長)から メッセージ

最初は地域再生ということが何かは分からずに、大きな夢を描いていましたが、一つ一つこなすことでその大きな夢が、現実的になっていきました。スタッフがプロ化して、評判も高いことがうれしいです。あおぞら財団がやってきていることに、私はまったく不満はありません。

財団を作ったら、企業も自治体も共にやってくれると信じていたのに、裁判の「しこり」、運動の「しこり」が残っていて、行政との関係性や、地元の人たちとの関係性がうまくいきませんでした。裁判をしていた時は「しこり」に気がついていませんでした。本当は、まちづくり案は地域の人たちと創らなければならなかったと、今では思いますが、当時はこちらが大きな希望を出せば出すほど、地域からは反発を受けてしまいました。当時の私たちの態度は運動的で、地域の人たち

と対話ができなかったと思います。最近の財団の手法は、患者会とは「角度が違う」と思います。特に自転車などは、違いを感じるが成果を出しているのを見るとそれでいいと思っています。たくさんの方が西淀川に研修に来て、患者会は語り部として協力していますが、あおぞら財団が西淀川公害のことを広く伝えようとがんばっているのがよく伝わってきます。私たちも、西淀川公害が地域の中で、日本社会の文脈の中で、消えかけていることを実感することが多くなってきました。あおぞら財団が公害を受け継ぎ、伝えるということに必死になっているから、私たちは信頼しています。スタッフが公害のことを理解し、公害患者を思い、活動しているのが伝わっています。芯さえしっかりしていれば、どこから切り出しても大丈夫だと思っています。地域の信頼を得て、地域の学校に授業に行ったり、インターンシップ生などの若い人も事務所に出入りしていて、いい雰囲気になってきたと思っています。



岡崎:もうあおぞら財団がハタチになったん?? ハタチおめでとう!!! (拍手)あおぞら財団ができてホンマによかったと思うよ。

山下:語り部ができてることとか、ホンマにあおぞら財団があつてよかったって思ってるわ。

岡崎:語り部やっていると、ぼけなくてすむからね(照れ笑い)。語り部の度にまだ緊張するけど。

山下:語り部は、最初は嫌やった。人前でしゃべることがこれまでなかったからね。

岡崎:最近、しゃべるためにたすきをかけたら一分でスイッチが入る。

山下:しゃべらな帰られへんようになってる(笑)。

岡崎:しゃべったこと、ちゃんとわかってきているか不安になるけど、語り部していると元気になる。元気が出る。

山下:小学校5年生に励まされたりして、うれしくなる。

岡崎:全く知らない人たちにしゃべるんやけど、勝手に友達ができて

るような感覚になる。

山下:こないだ、同窓会の近況報告に、語り部活動のことを書いたのよ。これまで仲のいい人にしか公害のことを言ってこなかったけれど。カミングアウトや。

あおぞら財団のこと、最初はとっつきにくいかなって思ってたけれど、リベラの放送ボランティアしたりして、みんなと仲良くなっていったわ。みんな面白い人たち。

岡崎:昔は、あおぞら財団のまちあるきとか、イベントもたくさん出で、最近やったらノラシゴトに参加してきたけど、最近、空き地見ると「菜の花植えたらいいのに」って思ってるんよ。

永野:私ら歳を取っていくけど、これからの若いあおぞら財団の人たちに、活動をゆだねられる。西淀川の空気をもっときれいにして住みやすい街にしたい。信頼もしている。患者会は患者会でこれからも活動するけど。

みんな:歳とってきて、自分の心配もしなあかんけどな(爆笑)

あおぞら
財団をつくった

西淀川公害患者 と家族の会 からメッセージ

永野 千代子さん

岡崎 久女さん

山下 晴美さん



環境教育から、公害地域のESD (持続可能な開発のための教育)

2005年から始まった国連ESDの10年に伴い、2006年から環境省ではモデル地域の募集が始まりました。西淀川は2007・2008年とモデル地域となり、これまで西淀川地域で行っていた環境教育に関わる人たち、社会教育や学校教育に携わる人たちが一堂に会して、これからの西淀川の「持続可能な開発のための教育」について議論して、そこから生まれたのが菜の花プロジェクトです。西淀川高校の環境教育の一環としてスタートし、佃地域や浜田化学(株)との連携、様々な団体との協力体制、(株)ニチノサービス敷地内で菜の花を育てるニシヨドガワノラシゴトに広がりを見せ、現在も、西淀川各地で廃油の回収が続けられています。ESDの考え方を踏まえて、公害地域の今を伝えるスタディツアーの実践や全国各地にある公害資料館の連携・協働をする体制を造ることとなりました。これらの取組が、日本におけるESDの好事例として内閣府のジャパンレポート(2014)に掲載されています。



あおぞら財団が作り出す学びの場で、公害患者が語り部をして、公害の経験を受け継いでいく活動の重要性を実感しています。これは患者の願いやから。



交通・福祉のまちづくりから 防災まちづくりまで

2006年に植田和弘理事主宰で「西淀川地域再生研究会」が開催され、これからの西淀川のまちづくりを検討した結果、環境と福祉を統合する参加型交通まちづくりの実践を試み、バリアフリーについて検討と提言を重ねてきました。2011年に東日本大震災が起こり、要援護者の避難が問題視される中で、西淀川における災害時の避難について取り組むこととなりました。要援護者には公害患者も含まれるからです。2013年には西淀川区役所と共に要援護者の避難訓練や、福祉避難所の開設訓練などを行いました。現在は、防災絵本『西淀川にたいふうがきた』を作成し、区内の小学校で防災の出前授業を行っています。



区役所や地域と、一緒に活動できるようになったことが本当によかったと思います。



国際交流 中国の環境教育の教科書に 西淀川公害が記載されています

公害の経験を英訳したり、1997年からはアジアのNGOとの交流や、1998年からは海外からの研修の受け入れを行ってきました。2007年からは中国の環境NGOとの交流に重点を置き、中国政法大

学公害被害者法律支援センター(CLAPV)や、環友科学技術研究中心などの協力を

得て、中国における公害の現状の情報交換、日本企業へのアクションのお手伝いなど、友好関係を築いてきました。環友科学技術研究中心が編集した環境教育の教科書に西淀川公害が掲載されたり、CLAPVの王燦発先生が最高人民法院の裁判官へ西淀川公害のことを講義してくださったりしています。

人と人との関係をつないでいることに意義があると感じています。



公害地域再生に 大切な視点



西淀川公害再生プラン(1991年)

西淀川が切り開いた道

西淀川の裁判で環境再生が前向きに出たということは、全国に対して非常に大きな展望を開いた。公害反対運動に対して進むべき道を示し、尼崎や倉敷、名古屋もそれに続いた。ただ、それが、市民運動として見た場合に、きちんとした組織を作れたのかという部分で課題が残っている。

公害裁判と金銭賠償

裁判の成果として加害者の責任が明らかとなり、被害者が救済された。しかし民事裁判で被害者の救済を金銭賠償だけで済ませるのは、公害対策

宮本憲一先生は日本の公害研究のパイオニアで、地方財政の分析から公害の構造を明らかにして、四日市裁判では被害者側の証人として法廷に立ちました。あおぞら財団設立のきっかけとなった地域再生の考え方は、宮本先生の考え方が強く影響しています。1996年から2011年まであおぞら財団理事だった先生から、あおぞら財団ができた意義と、これからの公害地域再生について語っていただきました。(2016年9月13日聞き取り)

の課題となった。

裁判闘争に公共的な意味合いを賦与

あおぞら財団のように公害裁判の賠償金を一部プールして、環境地域の再生を目指したということは、はじめて公害闘争が公共的な意味合いを持ったと言える。個人の人權の回復でお金をもらうのは正しいし、やらざるをえないが、それだけでいいわけではない。四大公害裁判のときは、損害賠償だけで終わったらおしまいだとずっと思っていた。

ベイエリア全体の問題

からそういう組織を作っていないと、大阪はほとんど大変になっていくのではないかな。

市民運動は自立を目指す

市民運動らしい市民運動とは、自立だろう。これは難しい。NPOは補助金が欲しいから行政組織とくっついてしまう。あおぞら財団が設立されるときに意見の相違があっても、もう少し市民運動的な役割を持たないと、財団がシンクタンクになってしまったら面白くないと言ってきたのだが、職員に運動をやれというのは難しい。本来であれば、あおぞら財団と共に活動する市民運動があると、あおぞら財団に活力が出る。あおぞら財団に活力があると思う。

万博構想とカジノ構想

今、夢洲での万博が計画され、大阪湾カジノ構想の問題が上がってきている。ベイエリアはそういうものではないという批判が必要なのではないか。ベイエリア全体の展望として環境再生の視点が必要だと考えている。

大阪府や大阪市のベイエリアに対する施策などの動きを常に見て、それとは違う別の旗印をあげることが、一つの道だと思っている。府や市の施策を批判する組織が、あおぞら財団のほかにはあればいいのだが、これ

やってきたことは間違いない

足元を見て、大きな視点を持つ

西淀川区の住民構成や課題点など社会的調査をする必要があると思う。足元を見ないといけないが、大阪府全体を見渡すようにしないと、西淀川区のことも見えないのではないかな。他の団体との連帯が重要。環境問



宮本憲一
インタビュー



あおぞら財団設立時に開催した公害地域再生シンポジウム1996年3月22日

「再生プラン」の 思い出と期待



傘木 宏夫 (かさき ひろあき)
プロフィール: 長野県大町市を拠点とするNPO地域づくり工房代表理事。環境アセスメント学会常務理事、自治体問題研究所理事など。元、あおぞら財団研究主任。著書に『仕事おこしワークショップ』(自治研研究社、2012年)、『環境アセスとVRクラウド』(フォーラムエイト出版、2015年)など。

西淀川再生プラン

突然の帰郷で、7年間お世話になったあおぞら財団を離れて14年。その際には皆様にも多大な迷惑をかけてしまいました。あらためてお詫言ひ申し上げます。

私が「共感スタッフ」として訴訟を支援する活動に加わり、その中から「西淀川再生プラン」が生まれ(1991年3月)、その具体化を森脇さんに頼まれてpartⅡ～Ⅵを作成しました。大震災のど真ん中の東灘区にいた私に、森脇さんは非情にも「明後日までに次の計画を出してくれ」「今度は具体的な金額を入れてくれ」と言うので、「それは無理!」と返事すると、「大事な時だから無理してくれ」と言うのです。(歴史的な局

面が近い)と察し、人生で唯一の二日連続の徹夜をしました。

仕事おこしワークショップ

財団が発足してからの私の仕事は、環境省からの委託業務や助成金を獲得し、それをやりこなすことに忙殺されました。必要なこととはいえ「地域再生に役立っているか?」と自問自答するつらい期間が続きました。

そうした中で、内発的な仕事おこしで、外部資金に頼らない事業のスタイルをめざそうと立ち上げたのが、2002年2月に区内の民主団体の方々とともにはじめた「仕事おこしワークショップ」でした。いろんなアイデアが出て、「も

しかしたら新しい財団の役割が見出せるかも」と思った矢先の突然の帰郷となりました。

郷里でのまちづくり

郷里に戻って始めたNPO地域づくり工房の発足にあわせて「仕事おこしワークショップ」(半年間6回)を開催しました。その成果から生まれたくるくるエコプロジェクト(ミニ水力発電の普及活動)と菜の花エコプロジェクト(菜の花オイルとバイオ軽油の普及活動)が両輪となって、自主財源比率7:9割で今日まで細々と続けています。その後、「風穴小屋の復元利用」や「自主簡易アセス」という分野を開拓してきました。あらゆる活

動が西淀川で学んだことに根ざしています。

これからの西淀川

便りに届く今日の財団の姿はいいききとしています。とりわけ資料保存・利用の活動は、全国的な役割も含めて、誇り高い事業です。一方で、「再生プラン」の理想への道のりには距離を感じます。しかし、外形的な環境の美しさは、人びとの学び合いに根ざした連帯が内実にあって「再生」といえるものになるのですから、着実な道を歩んでいただいていると心強く思います。あおぞら財団の20年に感謝しつつ、これからの20年の西淀川に期待をふくらませています。



中山高原菜の花



これまでと今後の財団活動 —20年を節目として—

理事長 村松 昭夫



裁判資料を手に環境省職員研修にて講義

あおぞら財団設立から20年、私が森脇さんから理事長を引き継いでからも7年になります。公害患者さんや賛助会員の皆さんをはじめ多くの方々から、財団への期待と関心、物心両面の多大なご支援をいただき、心よりお礼申し上げます。

所期の目的や皆様の期待から見れば、不十分な点や課題が山積していますが、20年間活動を続けるなかで、うれしいことに、あおぞら財団の名前や活動が報道されることも多くなり、様々な分野で広く知られ、地域にも根付いてきています。財団は、西淀川公害裁判を闘

い抜いた公害患者さんたちが、「子や孫たちに、二度と公害の苦しみを味わわせたくない」との思いから、いのちや健康を奪われた代償である和解金を拠出して設立されました。その思いは、「公害と闘い、地域再生の夢を」(宮本憲一先生の筆による石碑)に集約されています。これが財団の出発点であり、過去も現在も、そして今後、財団運営に関わる者が最も心に留め、決して忘れてはならない原点です。

この20年間、地域再生、環境教育、公害経験の発信、環境保健、国際交流を5本柱としてきましたが、

20年を節目に、①「環境・福祉・防災」の視点から、地域再生に取り組む、②公害の経験から学び、未来を創る市民を育てる、③国際交流に集約し、これらを有機的に結びつけながら活動を進めています。

とりわけ、地域再生では、環境、防災、福祉をキーワードとし、行政との協同も進み、環境教育では、教材作りを行うと共に研修や講師派遣の依頼も増え、環境省職員研修も毎年行われています。公害経験の発信では、「公害地域の今を伝えるスタディーツアー」を発展させた「公害資料館ネットワー

ク」の中心的役割を果たしています。環境保健では、公害患者さんらの苦痛を和らげる「呼吸ケア・リハビリ」の啓発普及に努めています。そして、国際交流では、この間中国や韓国など東アジアを中心に環境NGOとの交流を進めています。地域の皆さんの協力で開設しました「あおぞらいコバ」(あおぞらビル1階)も、いまでは「あおぞら市」の開催など地域の交流拠点となってきました。

20年の活動によって、多くの方々との結びつきが生まれ、それが今後の財団発展の何よりの財産です。慢性的な財政危機、職員の質量の強化など課題も多くありますが、今後も、公害患者さんから託された尊い思いを心に刻み続け、環境と地域の再生に向けた取り組みを進めてまいります。

右は、タバコのヤニ取り歯磨「歯磨スモカ赤缶（パウダー）」と葉緑素配合の「歯磨スモカ緑缶（パウダー）」各300円（税別）。左は、朝のホワイトニングと夜の殺菌・歯茎ケアという2種類を使い分ける新発想の歯磨剤「Cosmion Whitening Paste & Stippling Gel」2本セット2000円（税別）。



スモカ歯磨株式会社
住所／御幣島1-3-9
電話／06-6471-0151
http://www.smoca.jp/

ノスタルジックで最先端。 80余年、腕を磨いた歯磨きです

スモカ歯磨株式会社

西淀川
モノづくり
会社

創業当時の商品。紙に包んだ粉歯磨が主流の時代に、缶入り潤製（湿り気のある粉状）という斬新な歯磨だった。



「そのことをきっかけに、少量生産でも徹底的に品質にこだわった商品づくりを目指すようになりました」。



高校、大学はラグビー部、現在もラグーマンという藤野社長。1991年に入社し、2008年に父・洋一氏から社長を受け継いだ。

西淀川区役所の隣、サントリーで生まれた商品。ヤニ取りに特化した歯磨剤で、全国のタバコ店で販売されてヒットした。企画立案は、寿屋で多くの印象的な広告を世に送り出してきたコピーライター・片岡敏郎である。昭和7年、寿屋の歯磨剤部門が分離独立する形で「株式会社寿毛加社（現・スモカ歯磨株式会社）」が設立。寿屋から移った片岡のユニークな広告も相まって、スモカ歯磨はさらに販売量を拡大する。御幣島には大規模な工場が建ち、中国・天津にも工場が造られた。しかし、戦後から高度経済成長期へと向かうにつれて、歯磨剤市場は大手メーカーの商

品が席巻するようになり、会社は試練の時代を迎える。「海外化粧品品の製造販売を始めた」他社が発売する旅行用ミニチューブ練り歯磨の製造請け負い（OEM）をしたり、で、なんとか食いっかないでいる感じ。そうして徐々に規模を縮小していく時代が、ほんの数年前まで続きました。とは、現・社長の藤野和仁さん。一時は「会社をたたもう」と思うまでに業績は悪化したが、ある言葉をヒントに回復するようになった。「歯周病の研究で知られる歯学博士の方に、どんな歯磨剤があったらいいと思いますかって聞いてみたんです。すると「歯磨きの後、水ですすいでも流れずに歯に張り付く歯磨剤ってつくれないのかな」と言われたんです」。

品「Cosmion」を発売した。「他社の商品に比べる」と決して安くはありませんが、それだけの質を備えたアイテムです」と藤野さんは白い歯を見せる。経営が厳しかった時期、コスト削減のために地方への工場移転を考え、それを思いとどまらせたのは、地元西淀川のパートの人たちだといふ。

「歯磨剤づくりって、人手もいりませんし、知識や経験も必要です。どこか地方にパッと移って果たしてつくれるのだろうか。考えていくと、やっぱり西淀川の人たちの助けを借りないとダメなんだなって気づきました。そうして今日のスモカがあります」。

今や、御幣島の風景の一部にもなっているレトロな建物。そこでは最先端の歯磨剤づくりが行われている。



工程ごとに別れた製造工場の一角。従業員の方々に加え、およそ30名のパートの人たちが歯磨剤づくりを行っている。

取材・文：藤原武志

香み処まつ元

まつ元は、お昼は定食屋、夜は居酒屋になり、いつも地域の人でにぎわっています。お昼の定食は650円。いつ行ってもメニューが違うのはお母さんの努力で、一か月はメニューが重ならないようにしているそうです。小鉢がたくさんある定食は野菜不足を補ってくれます。夜のチョイ飲みは980円でビール小2杯と小鉢が2つ。おいしくてお得です。



（イラスト：とりやまひろこ）

第18回
ぶらりとゆるりと
西淀川めぐり
おおぞら財団職員がランチでよく利用するお店
おおぞら財団の近くにある定食屋さん
パスタ屋さんです。職員がよく利用しています。

所 大阪市西淀川区千舟2-6-4
休 日、祝祭日（昼は月曜日）
営 11:00-13:30 17:00-23:00
☎ 06-6471-4726



所 大阪市西淀川区野里3-2-19-1F
休 なし
営 11:00-16:00 17:00-22:00
☎ 06-6829-7233

パスタ工房

大野川緑陰道路沿いにある生パスタのお店。ランチ時間は女性客でいっぱい。ランチでいろいろなパスタが、サラダセットやスープセットの組み合わせで選ぶことができます。もちもちしたパスタは文句なしにおいしいです。お店から見える緑陰道路がうまい具合に借景になっていて、憩いの場になっています。夜の利用も可です。



世界の 大気汚染と 交通施策 II. インド編



天然ガス駆動化されたオートリキシャーは黄と緑の2色になっている

南 聡一郎
（京都大学大学院経済学研究科・特定助教）
おおぞら財団特別研究員



大気汚染で煙るデリー郊外の村の道

インドは、近年経済が急成長しています。しかし、それに伴いデリー首都圏は人口が急激に増加し、公害問題が発生してしまいました。いま、デリー市民は、自動車の排ガス、建設工事の粉じん、野焼きによる大気汚染公害に悩んでいます。そのため、近年デリーは中古車の走行規制などの対策を行っています。インド名物オートリキシャー（オート3輪のタクシー）は、市民の最もポピュラーな移動手段ですが、これらを全て天然ガス駆動車に変えました。また、日本の技術供与を受け、世界一長い地下鉄（デリーメトロ）を作っています。しかしながら、それでも大気汚染対策は間に合っておらず、PM10が200 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、PM2.5は100 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超える日があるという状況です。業を煮やしたデリー市民は大気汚染公害訴訟を起こし、環境裁判所（NGT）に訴えました。NGTは市民の訴えを認め、デリー首都圏政府の対策は不十分であり、ディーゼル車の削減を中心としたさらなる対策をとるように命じました。

1996年9月11日に設立されたあおぞら財団。設立20年を目前に控え、財団職員がそれぞれの切り口で、これまでの20年を振り返ります！

道路・交通環境に関わる、

あおぞら財団の20年の取り組み

うことで一つ一つ実現してきた。公害に苦しめられた地域だったので、さまざまな先進的な施策を導入し、全国のモデルとなる環境先進地域にしてい



毎年開催されている「西淀川道路環境対策連絡会」

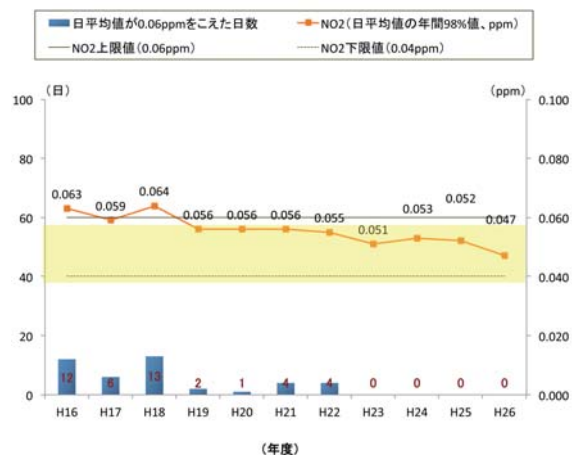
さまざまな対策が行われた結果、現在の空気の状況をみると、環境基準の一つである二酸化窒素（NO₂）は、ゆるやかな減少傾向にあり、ようやく基準の上限値（0.06ppm）を下回るようになりました。一方、PM_{2.5}は未だ環境基準を上回っており、さらなる対策を進めていく必要があります。また、歌島橋交差点の横断歩道撤去の是非を巡っては、双方の意見が平行線のままとなっています。裁判のときから道路連絡会に関わる、現あおぞら財団理事長である村松昭夫氏は「道路連絡会は国と患者（住民）が協議する画期的な場。対立する場面もあるが、互いに粘り強く話し合

の削減、環境ロードプライシングの実施、PM_{2.5}測定体制の確立、先進的な環境対策（光触媒・高活性炭素による大気浄化等）導入、歌島橋交差点の整備などについて議論されてきました。現在、阪神高速で実施されている環境ロードプライシングでは、国道43号や3号神戸線から5号湾岸線への乗り換えを促すために環境負荷が高い大型車の料金が3割引きとなつています。また、和解当時は広くは注目されていなかったPM_{2.5}ですが、常時測定が全国に先駆けて導入（2004年度に国道43号大和田西交差点局、国道2号新佃公園前局に設置され、現在も4ヶ所で稼働しています。

その1「どうすれば西淀川の空はきれいになるの」
西淀川道路連絡会の取り組みから
国と旧道路公団との和解においては、原告らが損害賠償請求を放棄するのと引き換えに、国・旧道路公団がディーゼル微粒子を含む汚染物質の測定体制を強化すること、汚染の激しい道路沿道に対する対策を強化すること、道路沿道の公害対策を検討する連絡会を設置することなどが和解内容に含まれています。
国・旧道路公団・原告が参加し、毎年1回開催される西淀川道路環境対策連絡会（以下、道路連絡会）では、大型車の交通量

西淀川地域でおきた大気汚染公害は、工場からのばい煙と車からの排気ガスによる都市型複合大気汚染でした。その法的責任を問うため、1978年に提訴された西淀川公害裁判は、1995年に企業と、1998年に国と阪神高速道路公団（当時）との間で和解が成立しました。

あおぞら財団では、大気汚染の原因の一つである、自動車からの排気ガスを減らすために、道路や交通環境を改善していく取り組みを続けてきました。これまでの取り組みを村松理事長とふりかえります。



西淀川区（出来島局）の二酸化炭素（NO₂）の推移

言研究会で1998年7月に「地域から考えるこれからの日本の道路」西淀川道路環境再生プランの提言」を作成し、その後もこれを具体化する形でPart6まで提言を行ってきました。交通規制と誘導策、低公害車利用促進や交通環境学習プログラムの推進、先に述べた環境ロードプライシングやPM_{2.5}測定などを訴えています。



環境ロードプライシング（阪神高速道路）

きたら」と話しています。

その2「低速交通のすすめ」

西淀川道路環境再生プラン

Part 1-6

道路・交通問題の解決に向けて、専門家や住民運動関係者などから構成された西淀川道路提



（西淀川道路環境再生プランの提言）

Part6では、自動車に依存しない社会づくりに向けて「低速交通」と「地域発」を謳っています。村松理事長は「現代社会が執拗に追い求めてきた高速交通ではなく、その対極にある徒歩や自転車、公共交通など私たちの身近な低速の交通手段を出発点にした地域発の交通まちづくりを進めることで、

人と人がふれあい、新たな文化を生み出す地域づくりにつながっていきたい」と語っています。
その3「私たちに何ができるのか？」
道路環境市民塾、エコドライブや自転車などの協働の取



御堂筋サイクルピクニック

り組み
あおぞら財団では、調査・提言づくりにとどまらず、様々な

人との協働で具体的な活動を進めてきました。

2003年度から10年間にわたり、道路環境市民塾では、道路・交通環境に関する政策づくりや各地域での人材育成のための参加型講座を開催しました。ボランティアによる運営委員が企画・運営し、様々なテーマ（例：バス・自転車、交通基本法、道路特定財源、フードマイレージなど）を取り上げ、講師を招いての講演とワークショップを実施し

ました。そうした取り組みの中から、新たなつながりやプロジェクトが生まれました。

具体的な取り組みとしては、大阪府トラック協会、行政、大阪大学と連携したエコドライブ事業（2003～2009）、自転車文化タウンづくりの会（2007）による自転車イベントや勉強会・提案づくり、自転車の適正な利用と自転車レーンの設置を求める御堂筋サイクルピクニックの開催（2011）、大阪でタンデム（2011）、大阪でタンデム自転車を楽しむ会（2012）を通じたタンデム（二人乗り）自転車の普及などです。



タンデム自転車



エコドライブトラック



道路環境市民塾

の人と語り合い、試行錯誤することで実現していくのでは村松理事長談」。
今後も、道路・交通環境問題の解決をめざし、持続可能な地域づくりへの「次の一歩」を一人でも多くの方とともに歩んでいくことが、あおぞら財団の使命です。 藤

ありがとうございます (2016年6月～2016年8月 敬称略・順不同)

お助けボランティア

長洲 智子
山下 晴美

寄附・寄贈者

早川 光俊
木野 達夫
松村 暢彦
西口 勲
吉田 巖
新井 真
石井 琢也
湯本 浩之
一般財団法人 淀川勤労者厚生協会
ポール・ジョバン
アジア砒素ネットワーク
王 燦発

緑道散歩

西淀川区内を貫く全長3.8kmの大野川緑陰道路。区民にこの緑道の風景を紹介します。



9月に職場体験に来てくれた歌島中学生が撮った写真です。カメラの操作に四苦八苦していたのですが、こんなにきれいとれました！この花、なんて名前でしょう？

スタッフツイッター 編集後記

林
あおぞら財団20周年の記念事業を行わないので、せめて『りべら』だけでもと願い、企画しました。ヒアリングや、事業まとめの作業はこれまでで「言葉にする」作業で、言葉になると、気持ちのおさまりどころができるのだと実感した日々でした。ここに歴史を綴る意味があるのだと納得。

りべら No.142 2016年11月号(季刊1日、年4回発行)

発行所:公益財団法人公害地域再生センター(あおぞら財団)
編集人:林 美帆
〒555-0013 大阪市西淀川区千舟1-1-1あおぞらビル4階
TEL 06-6475-8885 FAX 06-6478-5885
http://aozora.or.jp/ webmaster@aozora.or.jp
デザイン:(株)バード・デザインハウス
会員の購読料は会費に含まれています。
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

あおぞら財団
Facebookページ
「いいね!」を
押してくださいね。



入団のご挨拶

谷内 久美子(たにうち くみこ)

10月から財団の職員になりました。今までは特別研究員として働いていましたので、私のことをご存知の方もおられると思います。

私が財団の職員になった理由の一つは、西淀川の交通問題に真摯に取り組みたいということです。私は、もともと土木工学を専攻しており、「道路」は生活の礎であるという誇りを持っていました。しかし、6年前に道路連絡会に初めて出席した際、その誇りが砕かれました。生活を豊かにするはずの道路が人々の生活をふみにじっていることに打ちひしがれ、土木工学を学んだ人間の一人としてこの問題を見過すことはできないと感じました。道路交通の問題の解決は大変難しいものですが、患者さんたちの思いを道路政策に反映できるようにがんばりたいです。

プライベートでは、私には5歳と12歳の娘がいます。子どもたちは親のダメなところも良いところも真似して育つものなので、親が子どもに何を言うかよりも親自身がどう行動するのかということの方が大事なようです。今後は、財団の職員として働く姿を、社会人のモデルの一つとして子どもたちにみせていきたいと思っています。

財団では、道路連絡会をはじめ、自転車まちづくり、環境保健、みてアートなどを担当する予定です。私自身がいろんなことを学びながら、西淀川のよりよい未来につながる活動をしていけたらと考えています。新人らしい新人ではないですが、どうぞよろしくお願いします。



野里小学校での防災の授業の様子

西淀川菜の花プロジェクト ～エコでつながる西淀川～

【廃油回収量】
総合計37,633ℓ
(2009年7月から2016年9月まで)

2015年度 5,823ℓ
2014年度 7,064ℓ
2013年度 7,344ℓ
2012年度 6,472ℓ
2011年度 3,986ℓ
2010年度 2,509ℓ
2009年度 1,517ℓ

現在西淀川区内外55箇所、廃油を回収しています。回収団体募集中。

エコでつながる
西淀川推進協議会
事務局:
浜田化学株式会社西淀川事務所
06-6732-9658



ディサービスセンター

あおぞら苑



2006年10月1日にデイサービスセンターあおぞら苑は産声を上げました。西淀川公害裁判で四半世紀命をかけて闘った患者さんや家族のみなさまの思いが、ひとつの形になったのがデイサービスセンターあおぞら苑です。公害患者さんも高齢になり日々の生活を援助するために、また地域のみなさまが誰でも利用でき、「西淀川に住み続けて良かった。」と思えるようにとの思いがたくさん詰まった場所にしたいと思い設立しました。

【お問い合わせ】
TEL : 06-6475-0111 FAX : 06-6475-0114
URL : http://aozoraen.com/
運営: 社会福祉法人 あゆみ福祉会

◆あおぞら苑(事業所番号 2791000090)
〒555-0032 大阪市西淀川区大和田5丁目7番14号
開所曜日: 月曜日～土曜日(祝日は開所) 利用人数: 1日18人

◆あおぞら苑II(事業所番号 2771002173)
〒555-0031 大阪市西淀川区出来島1丁目2番4号
開所曜日: 月曜日～土曜日(祝日は開所) 利用人数: 1日25人



あおぞら御膳



あおぞらの湯

Hamada Kagaku

廃棄物でお困りなら 浜田化学のコンシェルジュに お任せください



廃食油
リサイクル
使い終わった廃食油



食品残渣
リサイクル
加工中に発生した食品残渣



廃棄物
リサイクル
その他の廃棄物

お客様に最適なメニューをご提案いたします。

詳しくはホームページをご覧ください。 [浜田化学 コンシェルジュ](#) [検索](#)

浜田化学株式会社 ☎ 06-6411-3457 <http://www.hamadakagaku.co.jp>



〈広告募集〉企業・団体・個人の皆さま

あおぞら財団の活動周知のため
「りべら」発行部数増にご協力ください。

「りべら」は、あおぞら財団が取り組む環境活動やまちの情報を伝える機関紙として、年4回(季刊)発行し、あおぞら財団会員様をはじめ、公共施設・店舗・各種施設にて配布しています。あおぞら財団の活動拠点である大阪市西淀川区を中心に、環境問題や地域再生に取り組む様々な方々に登場いただき、環境の取り組みやまちづくり活動の輪をつなぎ、広げていきたいと思っています。現在、より多くの方に読んでいただけるよう、発行部数増をめざしています。(1500部→3000部)。あおぞら財団の活動趣旨に賛同いただき、ともに環境活動に取り組んでいただける企業・団体・個人の皆さまから「広告費」という形での協賛をお願いできればと思います。いただいた資金は、本「りべら」の紙面の充実・印刷費として活用させていただきます。あわせて定期購読、会員も募集中です。どうぞ、ご協力をお願いします。



【りべら広告掲載費】
中面1/9頁:1万円/回
中面1/3頁:3万円/回
中面 全面:9万円/回
お問合せ先:あおぞら財団まで
TEL06-6475-8885